

---

見知らぬ世界にて、

ドミノ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

見知らぬ世界にて、

### 【Nコード】

N2343W

### 【作者名】

ドミノ

### 【あらすじ】

九柳大和は、異世界に召喚された。彼は元の世界に戻るため、一縷の希望に縋り、奮闘する。無様系主人公が色々と頑張る話の予定です。見切り発車で始めてしまいました。文才皆無ですが、ナメクジのような執筆速度で頑張ります。

## 1話（前書き）

忘れた頃に更新されているくらいの執筆速度で、進めていこうと思います。

## 1話

どうして……。——と、九柳大和は嘆いた。くりゅうやまと

学校へ行き、友達と話して、適度に勉強して、程よい疲労と眠る。その繰り返しのはずだったのに、どうして自分はこんなところに居るんだ、と。

——ピピピッ、ピピピッ。

まどろみの中に割り込んでくる目覚まし時計の音。頭のどこかでその音を聞く。しかし、暖かい布団に包まれる心地よさを手放したくなくて大和は、即座に慣れた手つきでスイッチを押して止めた。二度寝の誘惑に対して、起きなければいけない気持ちの方が勝った記録は未だない。

目覚まし時計を止めるために動き、肌蹴た布団から外気が紛れ込む。突き刺すような11月中旬の寒さから逃れるために首元までしっかりと包まった羽毛布団は、心地よい温かさを提供してくれた。

そのことに、幸せだあ、なんて小さな幸せをかみ締めて大和は意識を手放した。

数分後。

その幸せは剥ぎ取られた。

「起きなさい、大和」

頭の上から降ってくるような母の言葉と襲ってくる寒さに身を縮こまらせて、大和は、うあ、などと口から意味のない言葉が漏らして拒否の意を示す。

「はあ……」

毎日のこととはいえ、朝の弱い息子に母は呆れたため息を吐いた。

「起ーきーろー!!」

「っ、……」

「起ー!きー!ろー!!」

「分かった、起きるっ起きるから!耳の元で叫ぶなよ母さん!」

大声で叫ばれ、大声で叫び返す。

起床した大和に母は一仕事終えた顔で「おはよう」と言った。それに対して「はよ、母さん」と大和も返す。目立った反抗期も無く一般的かつどちらかといえば良好な親子関係を築いてきた2人だった。

大和は寝ぼけ眼に洗面所で水を浴びせた後、朝食を食べるために

一階リビングへと降りた。

テーブルには、いつものようにトーストと目玉焼きが用意されている。しかし、いつもなら一足先に朝食を食べ終わって新聞を広げている父の姿が、今日はなかった。

「あれ、父さんは？」

「昨日、田舎のおばあちゃんが亡くなったから、そっちに向かったって昨日の夜言っただでしょ」

「ああ、そうだった」と半分聞き流しながら狐色に焼けたトーストに目玉焼きをのせて嚙り付く大和。小さい頃に見たアニメ映画の影響で、食べてみたいと母に頼んだことがキツカケだった。以来、手軽だからという理由で、朝食の位置に陣取っている。

付けっぱなしのテレビから、どこに在るのかも曖昧な国で起きた事件で、大量の人間が亡くなったと垂れ流されている。悲壮というより無感情が、起床したばかりの頭に染み込んだ。

「明日から土日だし、お母さんもお父さんの方に行くから」

「えっ、じゃあ今日から俺1人!？」

「もう高校2年生だから、大丈夫でしょ」

「別に1人はいいいけど、ご飯は？」

「冷凍とかカップ麺があるから」

「出前とっていい？」

「物による」

「寿司」

「却下」

そんなやり取りをした後、カツ丼くらいなら頼んでもいいということで落ち着き、学校へ向かった。

2日間だけとはいえ、休日に両親がいないことに浮き足立つ大和。擬似1人暮らしの到来にドキドキと期待感が高まる。

しかしそのドキドキも、高校について今日の1時間目が小テストだと友人経由で思い出すと、急速に萎んでいった。寧ろ破裂したとすべきか。膨らんだ風船を針で突いたように。

「小テストどうだった、大和」

1時間目の休み時間、1つ前の席に座る男子生徒が大和に話しかける。

「急いで詰め込んだ割には、よく出来たって感じ」

「マジ?……俺不味いかも」

「洋介はいつものことだろ?」

「うつせーよ!」

軽口を叩き合って、移動教室のために席を立つ。それから大和は少し離れた友人に呼びかけた。

「弘樹、和也。次、化学室だぞ」

「おっけー」

「すぐ行く」

いつも一緒に行動する3人と共に、大和の1日はつつがなく過ぎていく。

放課後。

最近発売されたメガバーガーとやらの挑戦するため弘樹、和也、洋介と共に大和は学校近くの有名ハンバーガーチェーン店を訪れた。とても食べきれないという噂に流される形で挑んではみたが、口をめいいっぱい開いて一口かじれるかどうかというサイズと、胃もたれを起こしそうな肉汁とチーズを前に4人はあえなく敗北。店員もそんな客に慣れているのか、持ち帰りの袋を頼んだ4人を温い目で見ていた。

「しかし、あんなのよく商品化したよな」

帰宅途中、メガバーガーの残りが入っている袋を揺らしながら呆れ気味に洋介が言う。

「……食べるんじゃないか」

食の細い和也は、青い顔をして持ち帰りの袋を見ては、「憂鬱だ」と呟いている。

弘樹は電車通学なので、別の岐路についているからここにはない。

が、岐路が別になる前、彼も同じように遠い目で袋を見ていた。揺れのひどいローカル線に乗って、えづいている頃かもしれない。

「大和、どう思うよこれ」

「どうって……、食べるの無理っぽいかも」

大和は手元の重みを感じながら呟く。絶対に何人かは食べきれなくて処分しているであろうそれは、早く食べるよ、と袋の中で言っているようだった。

「贅沢品だなあ」

「こうでもして話題取りしないといけないのかな、飲食店って」

「こういつのつてさ、貧困の国に分けたらどれだけの人が助かるって、よくテレビでやるよね」

「ああ、あれだろ？年間ものすごい量の食べ残しがどうとかってヤツ」

何の気なしに、漠然とそんな話題が上る。そうである事実の一端を知っているだけで、「どうにかしなければ」などという使命感なんかは、大和にも洋介にもない。

ふと思つのは、やっぱり生きる環境って大事なんだな、ということくらい。

テレビで放送され、見ればそれなりに良心が疼く。けれど、布団に包まる頃には明日の予定に塗り替えられている。2日も経てば、気ままにファーストフードを食べ、デリバリーを頼めばピザが家まで届き、処理しきれない残り物は捨てる。そんな世の中に、肩まで浸かって暢気に生きている。

やっぱり他人事。テレビ越しにあるんだな、と、大和はこういった類のことに対して考えていた。

諦観とか達観といった見栄えいいものに分類されるでなく、過ぎってしまった後悔のような、“どうにもならないもの”と一緒に仕舞

つてある考えだ。

「……うえっぷ」

「ちょ、大丈夫!？」

「うえ、吐くなよ和也!どうしても無理なら大和のほうを向け!」

「ため、洋介!——ああ、こっち向くな和也!だめなら茂みに向かえって!」

そして、そんな思考も、和也がえづいたことにより簡単に掻き消えた。誰だって、遙か彼方の手に余る大事より、目の前に転がり込むハプニングで手一杯だ。

和也が未だ青い顔のまま別れ、その後に洋介とも帰り道が別々になる。

1人夕焼けの中に身をおき、両親のいない家で何をしようかと思いをめぐらせる大和。洋介とは家もそこそこ近いから、呼べば泊まりに来てくれるかもしれない、と徹夜ゲーム対戦を夢想する。

と、そこで。

「あ、今日から彗星が見えるんだっけか」

頭の隅においておいたことが大和の肩をたたいた。

「あれから何年ぶりなんだろうな……」

小さい頃、両親と手を繋いでみた彗星は思い出の中で、今でも鮮

明に弧を描いている。

よし、と大和は今夜の予定を決めた。――運が良ければ今日から見えるであろう彗星を探そう。見上げれば、夕焼けと紫が交じり合う中に、一番星が顔を出していた。

夜に向け万全の準備をするために、大和は足をはやめた。

その矢先。

――ズズツ、と足を泥に突っ込んだような感触に捕らわれる。

「……えっ？」

舗装された道では感じることもない感覚に、大和は間抜けた声を漏らす。

瞬間、引き込まれる。

足を引っ張られるように、真下へ。

大和が立っていた場所には、彼の姿は無くなっており、彼が引き込まれる瞬間に手放してしまった通学用靴だけが残されていた。

## 2話

突然襲ってきた落下の浮遊感に、大和の脳内は一瞬白で埋め尽くされた。

絶叫マシンが急落するときの独特の違和感が、腹部に到来する。そして、ワンテンポ遅れるように悲鳴が喉をノックした。

「——!？」

しかし、声がでない。

イメージとしては水中で叫んでいるのに近い。ただ空気だけが漏れて、そのままどこかへ解けていくようだ。

「——!?!——!?!」

水中の中を落下していくような奇妙な現象の違和感が、気味の悪さとなって大和の心をくすぐる。——死ぬかもしれない。漠然とそう思わせる嫌な感じだ。

大和は落下に逆らうように足掻いた。

それが功を奏したわけではないが、落下の感覚が薄らいで行き、やがて止った。大和も足掻くことを止めると、浮遊感が体を支えてくれる。

——息が、出来る。

激しく運動したため肩で息をするほどに呼吸は上がっていたが、しっかりと息が出来ることに気づく。体は水中にいる感覚だというのに、問題なく呼吸は出来ていた。

——なんなんだ、ここは。  
幾分落ち着いた大和の頭は、この不思議空間のほうへと思考を引っ張られた。  
垂直落下、水中独特の浮遊感、声は出ない、呼吸は出来る。——  
おかしいことだらけだ。

ぐるり、と周りを見回す大和。

暗い。

どれくらいの大きさの空間なのか分からない、ただ暗い空間。

ただの、暗黒が覆っている。

体を反転させて後ろを見るが、変わらない。右、左、上、下、どこも変わらない。そもそも上下左右なんて意味を成していない。全方位、暗闇。

自分は今、この空間のどの位置に居る。——中心か？——それとも端か？

出口はあるのか。——あるとすれば何処に？——どれくらい先に？

落下の感覚が無くなった途端に、右も左も、上下すら分からなくなっ

た。そんな状態で、果てしない暗闇の中に、ポツンと1人取り残され

たように浮遊している。

——怖い。

不安と焦りが大和の心を突いた。

落ち着きを取り戻したがゆえに出来た現状把握のせいで、今度は恐怖が影を落とす。

唇が乾き、息が上がる。

思考が、悪いほうへ悪いほうへと流れ、加速する。

溢れでてくるマイナスのイメージに歯止めを利かすことが出来ない。

鳩尾に穴でも開いてしまったかのような不安感が、存在を主張する。

「——！」

それら全てから逃れたくて、大和は動いた。

どこへ向かうとも考えず、水泳の犬掻きのように我武者羅に手足を動かし、自分の中の恐怖から逃れたい一心で暗闇を進んだ。

ここは、どこだ？

今、どこにいる？

俺は、何処から落ちて来た？

前へ進む。

変化しない暗闇を掻き分けて、ただ前へ。

落ちてきたのなら、上へ行かなきゃ。

どれくらい俺は落ちた？

数十メートルか、数百メートルか？

次は、顔を上へ向けて、浮上しようと手足をバタつかせる。

けれど、変わらない。大和がどれだけ進もうが暗闇は沈黙を保っている。

——そもそも俺はちゃんと進めているのか？

そんな不安は、芽生えると一気に心を侵食し、染めていく。

「——！——！——！」

足掻く手は、何も掴まない。伸ばした手は、何にも届かない。

けれど、もがく。不安感と孤独感と恐怖に萎縮する筋肉を無理やり動かす。

——……誰かつ！

そのとき、大和の右足に触れるものがあつた。

右足の足首あたりにあるなにかを感じ取って、大和は慌てて足元を見た。しかし、その場に目を凝らしてもなにも見えない。薄っすらと自分の足が確認できるだけだ。

逆さになって、何かがあった場所に手を伸ばす。

暗闇の中、確かに何かに触れたということを頼りに必死に探す。

——あつた！

左手に触れる何か。それを無くすまいとしっかりと掴み、藁にも縋る思いで手元まで引き寄せた。なんでもいい、とにかく大和は手掛かりがほしかった。

「——！！」

手元まで引き寄せて確認し、大和は驚きの声を上げて仰け反る。

——手だった。やせ細り骨ばった薄気味悪い人の手を大和は掴んでいた。

その死人のような手を反射的に放す。すると再び闇の奥へと紛れていく。

紛れていく手の先に、——顔があった。

男とも女とも分らない、毛の全て抜け落ち、頬の痩せこけた人の顔。死人のように閉じた瞼は窪み、鼻は削ぎ落とされたかのようにのっぺりとしていて、唇はひび割れている。

その顔が、ぐるっと動き大和の顔を見た。

窪んだ瞼越しに見据えられ、金縛りにあつたように動けなくなる大和。目など合わせてはいたくないが、体が石にでもなったかのよう  
に反応してくれない。反してその不気味な人間は、しっかりと見据えたまま大和の元へと漂い、胎児のように丸めた態勢を解いて、  
ゆっくりと手を伸ばす。

肋骨の浮き出た胴。

枯れ枝のように細い手足。

贅肉どころか筋肉さえ無くなり、文字通り骨と皮のみで男女の判断  
さえすでにつかない。

その人間の手が、大和の頬に触れる。大和の存在を確認するよう  
にぬるりと撫でたあと、そいつのひび割れた唇がかすかに開かれた。

——見ツケタ

搾り出すような声が漏れた瞬間、そいつの目と口が大きく見開か  
れる。

開いた目と口の奥に目玉や歯などは無く、周りと同じただの暗闇  
が広がっていた。

——見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ

「——！！！」

そいつの手が顔から体へと這い、歡喜するように声を上げながら大和の体を引っ張ってくる。その気持ちの悪さに大和は寄ってくる。そいつを振り払おうとするが、やはり体の自由が利かない。

——見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ

その手の感触はおよそ人のものと思えるものではなかった。体温を感じない爬虫類のような肌触りが悪寒を引き起こし、頭の奥で警鐘のように鈍痛が始まった。それでも、大和の体は動かない。命令系統が全てイカれてしまったかのように金縛りの状態から抜け出せない。

——見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ、見ツケタ

男とも女とも、子どもとも大人とも取れる声音で囁きながら、大和の顔真正面にやってくる。

目玉のない暗闇でじっと見続けて、——に、とそいつは笑った。

——見ツケタア

ビクッ、と大和の体が震えた。

——動く！

体の自由が戻ったと分かるやいなや、目の前のそいつを突き飛ばし、一目散に逃げようとする。しかし、そいつはすぐさま体勢を立て直し、体を反転させた大和の右足を掴んだ。

大和の目に映るそいつは、蜘蛛のような姿勢でぐいぐいと足を引っ張る。さっきまでの緩慢な動きとは比べものにならないほどの俊敏な動きは、獲物を狙う動物を連想させた。

逃げろ、と警告の言葉が脳内で点滅する。

がちがちと歯が鳴り、動悸が荒くなる。

目の端に涙が浮かび、ひゅ、ひゅ、と情けない息遣いが耳につく。

——なんで、どうして俺がこんな目に！

空いている左足でやたらめったにそいつの顔に蹴りを喰らわし、無理やり体を曲げて、逃げるために両手で掴んでいる手を引き剥がそうと爪を立てる。

けれど離れる気配はない。

頭が真っ白に染まっていき、助けて、という言葉しか浮かばない。

ずるっ、と突然背中にのしかかるなにか。

そいつは大和の耳元で気味の悪い息遣いで息を吐く。

慌てて振り向くと、足を掴む人間と全く同じ顔をした人間がいた。

「——！！」

声にならない絶叫が吐き出される。

大和の視界に映ったものは、沈黙を保っていた暗闇から這い出てくる痩せこけた人間たち。

どれもこれも同じ姿で這い寄って来て、生に飢えた死霊のように大和に絡みつく。

——見ツケタ

——出シテクレ

——助ケテクレ

何人もの不気味な人間が、ぽっかりと空いた目を見開き、大和に手を伸ばす。

——才前が出口ダ

——此処カラ連レ出セ

——マダ消エタクナイ

触れられる度、その場所から何かが体内に入り込んでくる感覚。  
息が詰まり、窒息していくように呼吸が困難になってくる。  
視界に霞が掛かり、意識が遠のいていく。

――出セ

――出セ

――ア　アア　ア

掠れていく意識の中、大和は右腕を突き出した。

一縷の望みもないのに、誰かが自分を引き上げてくれることを願  
って。

## 2話（後書き）

今は書くことが楽しいけれど、この状態がいつまで続くか……。とりあえず、次の話に取り掛かります。

### 3話

死霊のような顔をした人間たちに這い寄られ、体の自由を奪われる大和。

爬虫類の這いずるような感触が体じゅうにあり、まるで蛇の大群が蠢いているようだ。

次々と伸びてくる新しい手が、大和の体のどこかに触れるたび、ぞわり、と悪寒が駆け抜ける。加えて、その触られたところから何かが体内に入り込み、同化してくる感覚と力が抜けていく感覚の両方が襲ってくる。

——いや、だ……

生きる気力が奪われたかのように脱力感が体を覆い、思考が真っ白になっていく。

体が勝手に生きることを放棄するかのようになり、呼吸が小さく困難になっていく。

——死に、たく ない……

人間たちに埋もれていく中、辛うじて働く頭で必死に願った。これ以上ない疲労を振り払い、人間の手が少ない右手を虚空へ突き上げる。

——誰か、助けて……

その右手はなににも触れることはないはずだった。  
その右手はなににも掴むことはないはずだった。

しかし、右手はなにかに触れた。  
ぐにい、というゴムで出来た風船のような感触で、右手を押し戻  
そうと微かな反発を持っている。

そして、右手はなにかを掴んだ。  
ゴムのような感触をもつ壁を引っ掻くように、右手を握り込んだ。

次の瞬間。——バシャツと水風船が割れるような音と共に、大和  
は投げ出された。

どさつ、とともに受身も取れずに全身を地面に叩きつけられる大和。

「――ぐ、げふっげほっ！」

溺れた人間が岸に打ち上げられた時のように、口の中の液体を吐き出し、大きく息を吸ってはその反動で咽る。

「げほっ、がほっ、……っ、……、……」

ままならなかった呼吸が落ち着き、ひゅう、ひゅう、と浅い呼吸が戻ってきた。

「……、……、……」

ひどい倦怠感が大和の体を包んでいる。指の一本も動かしたくないほどだ。だらしなく半開きになった口から涎が垂れで、頬が触れている石のような感触の床を濡らす。

そんな状態でも、なんとか意識を保っている。眠ってしまいそうな意識を必死で巡らせ、脳に情報をおくる。

どうやらここは部屋らしい。

壁に掛けられた松明や、それに微かに照らされるレンガで造られた壁。

鼻をつく錆のような匂いと、口に残る鉄の味。

体に纏わりつくぬるりとした液体のような感覚。

大和は降りてくる瞼を懸命に開き、目玉だけ動かして周りを見る。

——コツ、コツ。

突如、足音が聞こえた。

近づいてきているようだ、と音の大きさと反響具合から察してその方向へと顔を動かそうとしてみる。が、体はいうことを聞いてくれなかった。生まれたての動物のように、未発達の筋肉がプルプルと震えるだけで、力が入らない。

——コツ、コツ。

その足音は一定のリズムで近づき、床に這いつくばるようなうつ伏せの格好の大和の頭あたりで止まった。そして、足音の主は大和の左腕を掴み、力任せにうつ伏せから仰向けへと大和の体勢を変える。

見下ろすような形で真上にある足音の主の顔は——

「ハッピーバースデー、俺」

——大和と瓜二つだった。

予想だにしない人間が立っていたことで思考はオーバーヒートを起こしたかのように、プツリ、とそこで途絶え、疲労の海に投げ出された大和は意識を失った。

「——クード！」  
「——ここに」

松明が心もとない光を提供する部屋で、男が呼びかけると、壁の隅の暗闇からにじみ出るように男が現れた。男の名はクード・アニエル。王家ルナヘイルの腹心として代々忠誠を誓うアニエル家の人間である。

クードは、視線の先にいる主の横顔を見た。  
名はジーク・フェイ・ルナヘイル。王家ルナヘイルの第二王子であり、2つ年下の幼馴染。そして、自分が命を掛けて守る唯一無二の主は、神妙な顔で言った。

「……上手くいったぞ」  
「では、計画の変更はないのですね」

ジークは、ああ、とだけ一言。  
視線の先には、ジークと見紛う顔の1人の男が仰向けに転がっている。

「しかし、ひどい血の匂いですね」

クードは小さな部屋に満ちる匂いに、思わず眉根を寄せた。

部屋の床と壁は、一面に大量の血をぶちまけたかのような有様だ。その中に、妙な方向へ捻じ曲がった四肢や、本来あるべきものが全て削がれてしまったかのような顔といった、人間だったモノが不気味に散乱している。

「アドウルの民の血肉を使った召喚の儀が、これほどとは」

「文献の文章を読むより、なかなか刺激的な光景だったぜ」

先ほどの光景にジークの胃が絞めあがった。――しばらくは悪夢にうなされそうだな。

部屋の魔方陣の中に立たされた10人のアドウルの民が次々に痙攣を始め、全身から血を吹き出す姿。それだけでなく、絶命して倒れた彼らの上に、彼らの血で出来た球体が発生し、大きくなるにつれ、倒れている彼らの体が千切れ、顔が変形し、干乾びていく。

ジークの脳裏に焼きついているそれは、御伽噺の地獄を思い起こさせる光景だった。

松明に照らされ微かに確認できる人間だったモノは、よく見ると霧のように霧散を始めていて、仰向けに倒れる男に吸収されていくのが確認できる。

「処理は、どのように？」

「このままにしておけば、1時間も経たないうちにこの人間の血肉

になるさ」

「……そうですか」

表情を変えないジークにクードは声を掛ける。

「……幼馴染として発言をお許しください、ジーク様」  
「なんだ」

相変わらずこちらを向かないジークにクードは従者としてでなく、友人として言葉を掛けた。

「悪役を選ぶのか、ジーク？」

「……どうだろうな」

ほんの僅かに顔を顰めたあと、ジークはそう答えた。そして、振り返ってクードと顔を合わせる。

「ルナヘイルの国は今、漠然とした不安が蔓延している」

仄かに部屋を照らす松明の明かりに照らされた顔に、表情は無かった。

整った顔立ちと、猛禽類を思わせる強い意思の宿った目。王族の証である抜けるような蒼穹色の瞳は、松明の炎のせい、微かに揺れているようにみえた。

「親父は不治の病に伏せ、兄貴は殺され、統治者の第一候補が放蕩王子ときちや、無理もない」

「放蕩王子なんて国民が流した言葉を自分で使うなジーク」

友人として、ジークが自分のことを卑下するのは腹が立った。しかし、力強くジークは笑って「そう思われることをしてきたから仕方ないだろ」と言う。理由を知っているクードとしてはなにか言ってやりたいが、本人がこの調子ではなにも言えなかった。

「まあ、予定通り進めるためには、この人間の力が伝承通りか確かめる必要がある」

「使用する場所は、予定通りカレード地下実験室で」

ジークは振り返って、気絶している自分と同じ顔をした異世界からの人間を見つめた。

「こいつへの対応も予定通りにする。記憶の吸収が可能なはずだ」

「余計な感情を持たせないために、ですか」

「ああ……、こいつの記憶から、こいつが最も『帰りたい』と思うような対応を考える」

それからジークは、ぼつり、と独り言のように呟いた。

「国民は力を持った王を求めている。

絶対的な安心を提供してくれる王という象徴を。

それが俺の仕事であり役割なら引き受けてやる。

そのための犠牲になってもらおう、異世界の人間」

ジークは飄々としていて生真面目な人間ではない。しかし、民よりも貴族の間を見据え、貴族よりも民の苦しみを見て生きてきた。表舞台に立つ気などなかったが、こうして自分に役が割り当てられてしまった。王族として荷を背負えと突きつけられてしまった。

なら、力ある者として力を振るおう。

自分の両手が広がるなら、役割を引き受けよう。

自分の大切なものを、大切な人を守ることができるようなら、何だ  
ろうと利用してやる。

悲哀ともとれる覚悟を含んだ声音にクードは、従者としてこの主  
を見続け、友人としてこの幼馴染の傍にしようと、密かに決意を新  
たにした。

## 4 話

——ピピピッ、ピピピッ。

目覚まし時計の音が聞こえる。

反射的に右手が伸びて、スイッチを止めた。

いつもの朝だ。

外気の冷たさや布団の感触など、たいした変化をみせない普通の朝。いつもなら羽毛布団に身を包み、まどろみに身を任せる。

けれど二度寝しようにも、大和は目が冴えてしまっていた。

嫌な夢を見たせいだ。

大和はその内容を思い出し、顔が半分隠れるほどまで掛け布団をたくし上げて身を縮こまらせる。布団の端をぎゅっと握り締め、震える体を落ち着かせる。きつく目を瞑ると、恐怖心が薄らぐ気がした。

「起きなさい、大和」

母の声。

聞きなれたはずのその声に、じわつ、と安堵の感情が大和の心に広がる。——ああ、悪い夢は覚めたんだ、と。

ゆっくりと目を開ける。いつも通り始まる朝に「おはよう」を告げるために。



激しい動悸に、眩暈と耳鳴りが付きまとう。

左手を額にあてると冷や汗を大量にかいている。

けれど、そんなことよりも恐怖に体が震えて、みっともなく歯がガチガチと鳴った。底冷えするようなあの気味の悪い声が、頭の中から離れずに反響し続け、大和の心を掻き乱す。

大和は自分の体を抱きかかえるように腕を回し、ぎゅっと力をこめた。冷や汗の不快感や生々しく感じる自身の体温など、震える大和に現実が覆いかぶさってきた。

「起きたか」

「——っ!!」

突然横から声を掛けられ、大和は飛び退くように声の主を見た。

「——お前!？」

1人の男が立っている。

「意識は、はつきりしているみたいだ」

そいつは顔の造りから背格好まで、目視できるもの全てがそっくりだった。

いやそれだけじゃない。声も、まるで自分の声を録音して聞いているかのような違和感があるものの、紛れもない大和の声だ。

その鏡でも見ているかのような瓜二つの顔に、大和は驚きに口を開閉し、なにか言おうとしたが、声が喉に詰まって意味のない音が漏れただけだった。

ただ違うものは、目と髪色くらいだろうか。――大和の目元に鋭さを付け足したかのような猛禽類のような青い瞳と、白金を思わせるような煌びやかなプラチナカラーの髪の毛が目を引き。

羽織っている茶色の外套がとても似合わないと思わせる、高貴さと気高さがその男にはあった。

「あつ、お、お、お前は、誰だ？」

「ふむ……、言葉はちゃんと機能しているし、魔力も充分感じられる。ってことは概ね理想通りだな」

大和を観察するような視線を向けながら、男はぶつぶつとなにかを言う。その男の行動から大和は、警戒を強め、冷静さを少しだけ取り戻した。

いざとなれば逃げ出せるように周囲に視線を這わせる。

灰色の壁でできた部屋。全体を照らしているものは、天井に埋め込まれた光を放つ鉱物らしきものだ。

他には、一人乗せることの出来る台に薄い布団を乗せただけのような簡素なベット。大和が横たわっていたのは、その部屋に置かれた3つのベットのうちの真ん中にあるものだった。

イメージ的には病室が近いかもしれない。しかし、病室のような白一色の清潔感はほとんど無く、灰色の無機質な冷たさが、大和には強く感じられた。

部屋の出口は男の後ろにある。つまり、強行突破するには男をど

うにかしなればいけない可能性が高い。

——ん？

と、大和の目が止まった。

ドアの横に木でできた簡単な棚があり、そこには見覚えのある制服が一式とメガバーガーの入った袋が置かれている。——……、ええ！？

大和はここで初めて気が付いた。——自分が一糸纏わぬ姿でいるということに。

「寝ているあいだに、持ち物検査と身体検査をしたからな」  
「……っ」

いつから独り言を止め、こちらを観察することに専念していたのだろうか。男は、大和がギリギリしか隠れていなかった股間を隠すように慌てた瞬間を見計らったかのように声を掛けてきた。

「もう、現状把握はいいのか？」  
「……」

気味の悪いヤツだ。

大和は奥歯をきつく噛み、男を睨むように見た。けれど大和の睨みなど軽く受け流すようにして、その、そっくりな顔はまるでこっちを見透かすように視線を投げかけている。

「こ、ここは、どこ、ですか？」

警戒を解かずに、男に問う。唇が乾いていて、少し動かそうとすると引き攣るような感触がした。恐怖心が燦つていて、言葉が口から喉に痞える。だが、地獄の住人らしきものに纏わりつかれたことに比べたら幾分考えをめぐらせるだけの余裕があった。

「お、俺を、誘拐、したんですか？」

誘拐、拉致、監禁。

大和の頭にまっ先に浮かんだことだ。——けれどなんのために？自分には大した利用価値なんてない一般人だ。大物政治家の息子や、資産家の家出身でもない、一般家庭に生まれた、ごくごく普通の高校2年生男子だ。

なのになぜ？

金銭面に難を抱える人間が追い詰められて突発的に犯行に及んだのだろうか。ともすれば、大和はたまたまそこにいたから、という理由で今この場所に連れて来られた可能性が一番高い。

「身代金が、なにかが、目当てなんですか？」

しかし、男の様子はどうだ。

こっちの問いに答える素振りもなく、余裕を含んだ表情で大和を観察でもするかのように見ている。髪にも艶があり、頬もこけてはいない、どちらかといえば裕福な過程育ちの印象を与える。

それに、そもそも見た目が瓜二つということは、年齢も近いと考えるほうが自然だ。高校生の大和を基準に考えると、15〜19

がいいところだろう。そんな若者が誘拐なんてするだろうか。

「あ、あの……、なにが、目的——」

「九柳大和」

「——っ、え？」

「誕生日は6月18日

現時点での年齢は17歳

身長175センチ、体重60キロ

両親の名前は、善次郎と恵美子。

幼馴染は、高槻洋介。

友人関係は浅く広く、概ね良好。最も親しい友人は内藤和也と工藤弘樹。

勉強は平均より少し上位。だが、とつさの機転が利くと周囲によく評価される。

運動はいたって平均値。陸上をやっていたが、中学卒業を期に本格的に取り組むことはなくなった。

趣味は最近サボリ気味の早朝か夜間のジョギング、読書、ネットサーフィン。

——で、間違いないな？」

「な、なんで……！？」

男がすらすら話したことは、間違いなく大和のことだった。

「記憶の吸収も、問題なく出来ている。……あとは——」

「な、なあ、なんだよ！なんで俺のことを知ってるんだよ！？」

調べたのか。——なんのために。  
突発的な犯罪か。——そうは思えない。  
計画的犯罪か。——それこそ、なんで俺なんだ。

「お、お前は何者だ！？……教えてくれ、なんで俺はこんなところにいるんだ！？」

大和が男に掴みかかろうとした瞬間、ビキッ、と嫌な音が耳の中で響いた。

「いつっ！？」

胸の、鎖骨のあいだ辺りに、釘でも打ち込まれたかのような鋭い痛みがはしり大和は思わずバランスを崩してベットから転げ落ちた。

なぜ痛みがはしったのかは分からない。しかし、とてつもない痛みだ。

片手で胸を押さえ、もう1つの手を床に着いて男を見上げる。佇む男は、片方の掌を上に向けるようにして構えていて、その掌には、青白く光る光球が浮かんでいた。

なんの光だ、と大和が疑問に思うとほぼ同時に、男はその光球を強く握る。

次の瞬間。

大和を激しい痛みが襲った。

## 5話

光球を男が掴んだ瞬間、今まで感じたことのないほどの激痛が、全身を駆けた。

「うゝあゝぐあゝあゝっゝっゝ！！！！？」

体が支えられず、床に芋虫のように転がる大和。

先の胸の痛みなど蚊に刺された程度にしか感じないほどの激痛だった。

まるで神経を剥き出しにされて刃物で擦られているような、まるで皮膚を剥いでいくかのような、表現できない痛み。

体が引き攣るようにエビ反りを起こし、手足が痙攣する。視界が涙に滲み、喉が引き裂かれるような絶叫を繰り返す。

激痛。——痛い

鋭く激しい痛み。——痛い！

意識が刈り取られる——痛いっ！

けれど気絶さえ許してはくれない——痛いゝっゝ！

足元でもがく大和を見下ろしながら、男はぐつと光球を握る力を強めた。



「があゝ、つ、あゝ、あうゝ、……あゝ、……、……」

少しのあいだ余韻に呻いたあと、荒い呼吸が大和に戻ってくる。肺が萎んでいたかのように空気を求め、必死に息を吸い込むと、今度は胃が振れるような感覚が到来して、軽く嘔吐した。横たわっていたためか、鼻のほうにも胃液が逆流したが、そんなことどうでもよかった。ぼやあつと歪む景色をただ収め、必死に息をすることで精一杯だったからだ。

「九柳大和」

頭上から投げかけられる男の声に、ビクツ、と大和は反応する。痛みによる恐怖で、男を見る大和の目に怯えが混じっていた。

「ここでは、これが俺とお前の力関係だ」

男が見せ付けるように手を伸ばし、再び掌の上に光球を出現させる。

「ぐうつ！」

ビキッ、と耳の奥で嫌な音が響き、呼応するようにして、男に掴みかかるうとした時と同じ痛みが同じ場所にはしった。

「なん、だ……、これ？」

さっきは頭に血が上って気づかなかったが、よく見ると大和の全身に、まるで拘束するかのように楔形文字にも似た模様が淡く光る

光球と同じ色で発光し、浮かび上がっている。元を辿ると大和の胸元に集約されていた。左胸、心臓の辺り。そこには掌大の魔方陣が浮かび上がっている。

まるでアニメのような光景だが、現実味がありすぎていて夢だとは思えなかった。激痛で頭がぼんやりとしていて、思考する力が上手く機能していないだけかもしれないが、それを差し引いてもだ。

「分かったか、九柳大和」

男が光球を握る素振りをしてみせたから、慌ててゆるゆる首を振り、肯定の意を示す大和。それに満足したように男は光球を消した。体にあつた魔方陣も同じように消えていく。

「さて、色々と思ってることもあるだろうが、まずは服を着て落ち着け」

シニカルに笑って男は言う。

どの口が言うんだ、と大和は噛み付こうとして、寸で言葉が喉から出てこなかった。反抗すればあの激痛をまたこの男が与えてくるのではと思ったら、従っておこうと心が萎縮してしまった。

「俺は、ここを出て左に直進したところの部屋にいる。落ち着いたら、聞きたいことを聞きに来るといい」

それだけ言い残して男は部屋から出て行く。

1人残された大和は、しばらく動けずにいた。体の痛みはとつく

に無くなっではいるが、幻痛に体が反応しているかのように、時々筋肉が在り得ない方向に引き攣っては、動こうという気持ちを削いでいく。

その回復を待つために少し今後のことを大和は考えた。

頭を巡るのは、あの男は何者だということ。

次に、ここはどこだということ。

最後に、自分はなにをされたのかということ。

男は聞きに來いと言った。言い換えればそれ以外の選択肢はない、と半ば強制のような台詞であり、大和が逃げるといふ選択肢を取ることがないと思っているかのような態度だ。

実際、大和は逃げようという考えを浮かべ、真っ先に取り消した。痛めつけはしたけれど殺しはしなかったということは、人質といった利用価値が向こうにあるから。なら、警察に期待したほうが一番助かる可能性がある。加えて、あの魔法のような力で激痛を与えることができるのだから、どれだけ逃げようともこっちの動きを封じてすぐに見つけ出されてしまうような、嫌な予感がしたからだ。

——魔法……？

大和の中にある1つの可能性が生まれるがすぐに、そんなはずはないと、その中学生の空想のような在り得る筈がない可能性を否定した。

「——くそ……」

そろそろ動いてみようとして、ぐっと体に力を込めて立ち上がるうと踏ん張る。

間接がぎりぎりど軋みを上げ、内臓がぐにやりと動いた。

「うっ、ぐうえ、——げぼ、げえ、うえ」

さっきよりも大量に逆流してしまい、すっかり胃の中が空っぽになる。吐瀉物の中には少量の血と食いしばったときに欠けたのであろう奥歯が混じっていた。

涙やらなにやらで汚れた顔を拭って、なんとか立ち上がるが、上手く力が入らなくて大和はベットに仰向けに倒れこんでしまった。

「なんなんだよ……」

弱音半分愚痴半分の言葉が零れる。

どうして大和がこんな目に会っているのか。

その答えをあの大和と瓜二つの男は知っているはずだ。そして聞きに來いと言ったということは、少なくとも答える気はあるらしい。

しかし、信用してはならない。

現状だけで考えれば、大和にとって危害を加えてくる危険人物であり敵の可能性がとてつもなく高い。

男が正しい答えを言うとは限らないし、都合のいいように捻じ曲げて教えてくるかもしれない。けれど、大和には圧倒的に情報がないことに加え、反抗する術がない。映画の主人公よろしく相手の虚を突いて優位に立ったり、逆転の一手を打ったりなんて出来っこないこと、考えずとも分かりきっていることだ。

出来ることが限られている、と、大和は呻いた。

可能な限り相手を刺激せず、その上で自分の知りたいことを聞き、相手の要求を聞く。

「——無理だよ……」

考えてを纏めた言葉は弱音だった。

そんな交渉の真似事、一介の高校生には荷が重過ぎる。

そして、何より怖かった。

相手は正体不明で。

十中八九犯罪者で。

単独なのか、複数なのかも分からなくて。

方法は分からないが、簡単に大和を痛めつける力がある。

「そんなの、どうやって相手にするんだよ……」

1人で、しかも、持っているものといえば学ラン制服一式に、ハンカチ、メガバーガーのみ。これといった武器らしき物もなければ、武道の経験なんて体育の時間に少々経験した程度だ。

硬いベットのうえで大和はぎゅうと赤ん坊のように体を丸めて、夢なら覚めてはくれないだろうか、出来ればこのまま消えてはくれないだろうかと願ってみる。

そうしてから5分ほど経っただろうか。

——バスッ、と、大和は布団を殴りつけた。

こうしていても何も変わらない、と恐怖心に見てみぬ振りをし、無理やり自分を奮起させて制服を着るためにベットから起き上がる。

あの男の下へと行くために。

## 6話（前書き）

設定を考えるのが凄く楽しい。  
だけれど、設定を文に起こすのは難しい。

## 6話

制服を着て、大和は廊下へと出た。

冷たい雰囲気がある、薄暗い、灰色の廊下だ。

道幅は人が2人すれ違える程度だろう。

光源はさっきの部屋と同じで発光する鉱物のようなものであり、その光が淡く頼りなげなものだから、無機質な灰色の廊下と相まって廃墟を思い起こさせる。

いや実際、ここは使われなくなつて久しい建物なのだろう。朽ちかけていて向こう側が見える扉や、隅に張る蜘蛛の巣が物語っている。

一歩踏み出す度に、空恐ろしくスニーカーが地面を踏む音が反響した。むなしく響くそれは、この場所の雰囲気に妙に合っていて、やけに強調されて聞こえる。

ふう、と大和はボタンを1つ外した学ランの首元に人差し指を入れ、着心地の悪さを緩和させようと、ぐいと動かした。もう結構な期間着ている制服からする違和感が気持ち悪い。その違和感の正体は……、

……やっぱり直接学ランを着るのは気持ち悪いな。

地肌に直接学ランを着ているからであつた。

なぜ、学ランの下にYシャツを着ていないのかというと、単純に

Yシャツが着れた状態になかったからだ。別に大和とて、好き好んでこんな特殊な格好をしているわけではない。

大和がYシャツを着ようと手にとってみると、白かったはずのそれは大部分が赤く染まっていたのだ。触り心地もごわごわとしていて、曲げるとばりばりと音を立てる。それに加えて、血生臭い匂いを放っていたため、大和は着ることを断念した。

いや、臭いに関しては制服全てにあった。まるで、それを着たままどっぷり肩まで血の海に浸かったかのような……、とそこで大和は考えることを止め、背に腹は代えられないと一番着ることを遠慮したいYシャツのみ除いて、制服を着たのだった。

そんな経緯があつて大和は今、廊下を歩いている。

左に直進して突き当たりの部屋にいる、というアバウトさが見え隠れする説明だったが、迷う心配はなさそうだ。部屋を出てすぐに左を向けば、真っ直ぐ先に扉が確認できた。距離にして50メートル前後であろうか。学校舎の廊下の端から反対端を見た感覚に近い。

ちなみに右を向いたら小部屋1つ分くらいの距離があるだけで、行き止まりになっていた。

分かれ道は、少し先の右側に一箇所しか無い。  
全体で見れば、左右のバランスの悪いT字のような廊下である。

一歩、また一歩。

歩を進めるたびに、気が重くなるのを大和は感じていた。

部屋を出るとき、決心をつけてきたはずだった。しかし、扉との距離が縮まるにつれてその決心がぐらつき、壊れてしまいそうになる。恐怖というものは、簡単には拭えないものだ。見てみぬ振りをしたところで、そのまま消えてくれることはない。

あの扉を開けたら、ぐさり、と殺されはしないだろうか。  
単なる愉快犯で、こっちに希望を持たせてから突き落とすのだろ  
うか。

大和の頭の中で、恐怖で肥大した思考のせいか、悪い結末が浮か  
んでは消えを繰り返している。

目的の部屋の前までたどり着いた。  
けれど、立ち尽くしたままで、両開きの扉へと手が伸びない。

「……、」

口内の少ない唾液を、音を立てて飲み込む。

ドンッ、とたいして大きくもない扉だというのに、妙な違和感を  
覚えるのはやはり、

「ビビッてるな」

ということだ。

「すう……、はぁー」

大げさともとれる深呼吸をして、大和はきつく扉を睨んだ。  
心の中で奮起する。

大丈夫、きつと助けは来てくれる。頑張ってください、国家権力。  
大和は扉に手を伸ばした。

両開きの扉を押し開けて入った部屋は、部屋というには大きすぎた。バスケットコート1つ半くらい、体育館より少し小さい程度の広さとも思えばしっくりくる。

2、3歩室内に踏み込み、辺りをグルリと見回す大和。

「いない……」

同じ顔の男は、ここにはいなかった。

「騙されたのか？」

当然の疑問を口にする大和。

ただっ広いだけで何もない。いや、よく周りを見れば、右の壁の一部がガラスらしきものになっている。この位置からでは光の反射で向こう側はよく見えないが、なにがあるのだろうか。

大和が、その場所へ行こうと歩みを進めたすぐ後、後ろで「ごう」という音が聞こえた。

振り向いて音の原因を見ると、

「——なっ！」

壁が動いて、扉を飲み込んでいた。

「ちょ、ちょっと待って！」

あり得ない。

あり得ないが、現に目の前で扉がもう消えている。

走り寄って、大和はその扉があった場所を触る、叩く、軽く殴ってみる。——なにも反応しないただの壁になっている。

「嘘だろ」

閉じ込められた。

ぐるり、と見渡してみるが出入り口は、たった今壁に飲み込まれてしまったあの扉のみ。そして、なんとも馬鹿げた話だが、その扉は壁へと飲み込まれてしまった。

多少混乱はしたが、今は考えることは止そうと頭を切り替える。  
いろいろなことが立て続けに起こって頭のネジが何処かしら緩んでしまったのか、すんなりと頭は壁が動いた事実を受け入れてくれた。  
さて、と大和は唸る。

嵌められた、……と考えてよいのだろうか。

あの男が、俺をここに閉じ込めてなんのメリットになる？

『や、九柳大和』

「……っ！」

突然、あの男の声が響いた。拡声器を使って何処からか放送を流しているような印象だ。

『悪いね、問答の前にちょっとした検査をさせてもらうよ』

男の言う検査とはなんなのか。

大和が疑問を口にする前に、向かい側の壁がごっこ、と唸りを上げ、通路が現れた。

そっちへ行けてことか？

大和は開かれた通路へ向かう。が、その通路は大和のために開かれたわけではないと、すぐに思い知ることになった。

「え」

通路の中の暗がりにも光る双眸と、低い唸り声。  
たたつ、と俊敏な動きで走り出てきたそれは、鼻をヒクつかせながら周りを見回した。

「……い、ぬ？」

焦げ茶色い毛並みをした、大型犬サイズの四足獣。しかし、大和が見慣れている犬というものとそれは、違うように感じた。

全体的に短めの体毛だが、頭頂部から尻尾までの背骨のラインにタテガミのような雄雄しい剛毛が生えている。口元に見え隠れする牙は、大きくはないが獲物を狩るための実用性を重視したかのように細かく、かつ鋭い。隙間からは白く濁った涎が垂れでている。腹を空かせているのだろうか。

「……、……っ」

「ぐっぐっ」と犬の後ろで口をあけていた通路が壁に飲み込まれていく。

密閉された空間に、人間一人と獣一匹。

大和は、背中に冷や汗が流れるのを感じ、無意識に半歩下がってしまった。その微かな挙動が、獣の注意を引く。

大和を視界に入れ、低く喉を鳴らす獣。

飛び掛る機会を窺うように身を低くし、見据えながらゆっくりとだが確実に追い詰める動作で、距離を詰めてくる。その様子だけで、大和の中に押し込めた恐怖があふれ出す。

『九柳大和』

男がなにか言う。けれど、それに注意するだけの意識が余分になり。

一時でも注意を放してしまえば、きっと食いつかれる。生存本能とでもいうべき感覚が大和の心の中で警鐘を鳴らし続けているため、視線を外さずにゆっくりと後ろへ下がるのが精一杯だ。

『さあ、生き延びてみる』

——ヴォオッ！

「ひっ！！」

獣が吼える。

その威圧に、下がる足を絡めてしまい、大和は尻餅をついてしまった。その隙を獣は逃すはずもなく、大和を食い殺そうと一気に速度を速め、飛び掛った。

「うああ！！」

慌てて、這うようにして動き、獣の初撃は辛うじてよける。

横数センチのところに獣が着地したことにより、獣臭と唸り声が大和の感覚を揺さぶった。

「ああっ！！？」

半ばパニック状態の大和。一層リアルに感じられる獣の質感と、

如何にかしなければ喰われるという思考がないまぜになって、無茶苦茶に腕を振り回した。

ギャンツ！！

と、獣が鳴き声を上げて軽く吹き飛ぶ。カウンターのかたちで、顎に腕が入ったのだ。

しかし、とても冷静とはいえない大和には、なぜ獣が吹き飛んだのかは理解できなかった。ただ、好機だと思えない。

逃げなければ、とその瞬間に脱兎のごとく駆け出す。

それが、いけなかった。

背を向けてしまったのだ。

め、  
獣は大和の背を恨みがましく睨むと、駆け出し、一気に距離を詰

「ぎゃああああー！！」

大和の右太腿に、深く喰らいついた。

## 7話（前書き）

用語の説明など、近いうちに説明回を設けます。

## 7話

「ありや、やっぱ戦い慣れしてないか」

喰らい付かれた大和を見て、ジークは少ばかり期待はずれの混ざった声音で言った。

しかし予想していた結果である。記憶の吸収をして大和がどんな人間で、どんな生活下で過ごしてきたのか、あらかた把握していたからだ。

「……どうしますか」

クードが、透明な魔術壁の向こう側の光景から目を反らさずに指示を仰ぐ。

「いや、まだ助けに入るには早すぎる」

ジークも同じように向こう側の光景を見据えたまま言った。

視線の先で大和は、足に喰らい付いているワーウルフの鼻先を殴り飛ばしていた。

完全に錯乱した素人の動きである。しかし、どうやら筋力は相当なものらしい。偶然のカウンターの時といい、顎の力と足腰が強靱なことと知られる『古狼の眷属』の一種であるワーウルフを1・5メートルほど吹き飛ばしている。大男の鍛え抜かれた大木のような太腕ならまだしも、あの細腕からは考え難い力だ。

……これも、召喚されし異世界人の力か。  
しかしそれだけだ。運は、まあまあ味方してくれたようだけれど。

『古狼の眷属』種は本来群れを形成する。そして、余程のことがない限り1匹になることはない。数匹の群れの中にリーダーが存在し、統率の執れた行動の元に狩りをするのが特徴だ。

ワーウルフとて例外ではない。ある一点を除いては。

ワーウルフは『古狼の眷属』種の中でも、リーダークラスは別として個々ではそれほど力はない。その代わり群れの連携は恐ろしく脅威であり、その基礎である階級意識がとても高い。そういった生態の種であり、規律を乱す者は群れから追い出される。

問題は、その追い出されたはぐれだ。よくある話が、別の種に食い殺されて終わりというものだ。生き残る確立は低い。

しかし生き延び、極限まで腹を空かせるとどうなるのか。考えられないほど身体能力が跳ね上がって凶暴になり、理性を失って、同族だろうがなんだろうが喰い散らかすのである。

空腹が収まっても、個体差はあるがその状態が一定の期間続き、仕舞いには新しい群れを形成しているか、適当な同族の群れのリーダーを食い殺し、新しいリーダーに居座っているかだ。

その点大和は運がいいほうだといえる。

後ろを向いた大和は右太腿に喰らい付かれた。初撃のカウンターの攻撃力から考えて、相手の機動力を削ぐことを優先したのだろう。つまり、ワーウルフはまだ理性を失うまでには至っておらず、日をつたおかげで、大和が生き延びる可能性が生まれたのだ。

定石としては、開いた距離を詰めさせないために魔術で一気に仕留めてしまうものなのだが……。大和はそれを行う気配がない。

「……もしかして、まだ自身の内にある魔力に気づいてないのか」

その可能性に、ジークは思わず齒噛みした。

あれほど内に渦巻く大量かつ高密度の魔力なら、使い方は分からずとも、ただ相手にぶつけるだけでダメージは出る。しかし、大和はその強大な力に気づいていないのかもしれない。

「あれだけの魔力なら気づかないほうがおかしいだろ」

こちらの世界の住人は、自身の内の魔力なんて、量はともかく存在自体とその動かし方は物心つくところに違和感として感じ、本能的に理解することができ。加えて、文献には魔術にたいして類稀な才能があるなどと書かれていたものだから、ジークはすっかり失念していた。——魔力の存在に気づかないということ。

「……っ」

ジークがこれから行う計画において、大和は代えの利かない大切なキーであり、重要な駒だ。だからこそしっかりと把握しておかなければならない。何が出来て何が出来ないのか、そして何処まで出来るのかと、どの程度の力を持っているのか。

かつて一度だけ、大国が生まれる前に召喚された異世界の人間に

ついて書かれた文献曰く。

その者、身にそぐわぬ力を宿す云々。

その者、類稀なる魔を持つ云々。

その者、傷つくことを知らず云々。

つまり、外見からは想像し難い力を持ち、魔術に関する才能も抜kindでいて、傷つくことはない。ということらしいとジークは踏んでいた。

それが真実ではない場合。

所謂、英雄の神格化というものだった場合だ。

今となつては異世界の事実は隠され、大陸統一の英雄である異世界の人間は御伽噺として、存在を作り変えられて一般人に認知されている。英雄が異世界の人間だと知っているのは王族とその近縁者のみのはずだ。

もし、異世界の人間だということを隠蔽するため、当時の誰かが神格化させるような文献を残していたとしたら。——その場合、大和を失うわけにはいかないので、命令1つでクードが助けに入れるよう準備をしてある。

大和が文献にそつた力を見せたのは、いまのところ腕力のみだ。魔力なんて宝の持ち腐れ状態であり、傷だつて付き放題である。

俺の認識が少々甘かったのかもしれない。

「……クード」

と、声をかけるとほぼ同時に、ジークは喉元まででかかった言葉

を飲み込んだ。大和を観察していたクードも息を呑んだことが空気と共に伝わる。

その視線の先では――。

「ぎゃああああ!!」

大和は何度目かも分からない悲鳴を上げ、前へ倒れ伏した。右太腿に生温かさを持った激痛が存在している。その温度は熱となって首筋へと駆け上がり、脳髓に叩き込まれた。

「づ、っああ!」

振り返ると、血走った目で獣が足に喰らいつきながら見上げている。そして、今にも喰い千切らんばかりに唸り声を上げ、肉を引き剥がそうとしている。

「はなせっ、はなせよ、このっ!」

痛みでじんわり涙が滲む。

アドレナリンの過剰分泌だろうか、脳が熱を持って上手く働かず、ただ怒りにも似た感情で目の前の獣目掛けて拳を振り下ろした。

くぐもった叫びをあげ獣は、

「うぐあああ――！！」

ぶちぶちぶちつ、と大和の肉ごと吹き飛んだ。

「あ、ぐ、ぐふえ、ああ」

涙と鼻水で奇妙な嗚咽が漏れた。

灰色の床に大和の血溜まりが広がっていく。

殴り飛ばした拍子に持っていかれた右太腿の殆どは、生々しく花開いたかのように筋肉を露出し、止め処なく血を吐き出している。その中に混じって骨も見える。傷は深い。

だが不思議と、痛みは感じないほどに小さくなっていた。動かない、という違和感しか感じることはない。

殴り飛ばされた獣は、少し痛みにもがいた後、大和の肉をあまり租借することなく、ほとんど丸呑みのようにして飲み込んだ。開いた口元から垂れ出る涎に血が混じっている。

獣は、美味そうに喉を鳴らした。

目の前にご馳走が転がっているとでも言うように。

「ううあ、つ、こい、つ……」

異常なほどの高揚感と怒気。

大和の中に渦巻く、静かに荒々しい力の奔流。

間近まで迫った“死”が、大和に恐怖と痛みを忘れさせ、根本的な感情と生き残るための術を引きずり出す。

死にたくない、生きる。

必ず生き残ってみせる。

左足を頼りにして、ぐつと這い上がり、立ち上がる。

右足は辛うじて動くのみで、ほぼ繋がっているだけだ。

俺は、生きる。

渴望。

それだけが大和を動かした。今度は獣から目を反らさず、睨むようにして。

「……俺を、食いやがったな」

ヴヴォア！

獣が吼えた。

「あああああ  
あ  
あ  
あ  
あ  
!!!」

威嚇するように。自分を鼓舞するように、大和も吼えた。

やれる。こいつを殺せる！

自信が大和に満ちている。倒せる根拠などない。けれど大和は確信している。

こんなにも、力が溢れているじゃないか！

ずるずると渦巻く得体の知れない熱が体内を駆け回っていることが、そう思わせていた。

ダンツ

大和は右足を踏み出した。その異状に気が付かないまま、目の前の敵に向かって突進する。

そう、まさに今、異状が起こっているのだ。

動かすことが出来ないほどの傷を受けた右足。だというのに、なんなく大和は動かしてみせた。大きな矛盾だが、その答えは簡単だった。

まるで肉が溶けていく映像を高速逆再生したかのように、傷が治癒しているのだ。

## 8話（前書き）

初戦闘描写なんで上手く書けない。  
こんな出来じゃ申し訳ないから、練習しなくては。

## 8話

大和は自身に起こっている異状など全く気にしないまま、目の前の獣に戦闘を仕掛けた。

ふわふわとした高揚感が体を包み、今ならどんな無茶だろうと簡単に出来る気がしてならなかった。“在りえないこと”を“在りえること”にするだけの力が備わっているという錯覚が支配する。

だからなのだろう。自身の身に起こっていることだというのに、その異状を見過ごしているのは。

大和にとって、むしろその異常は正常なものなのだと勝手に認識し、受け入れてしまっている。

戦う、殺す、勝つ、生き残る。

今、大和を動かすのは、かちかちとスライドショーのように入れ替わる短絡的な思考と、滾る力の奔流だ。

「あああ！」

身を低くし、飛び出すように前進して距離を詰める。そしてその勢いを殺さぬまま、体重を乗せ、威力を上げた拳を獣の眉間目掛けて打つ。

が、獣とて大和の速いだけのパンチを受けるほど鈍い生き物ではない。

その拳を避けてみせ、バランスをほんの少し崩した大和の隙を突くように大和の肩へ爪を突き立てる。

「ぐつ、う」

肉を突き刺される痛み。

痛みに怯む、しかしそれも一瞬のこと。

獣の爪が肩の肉を抉り出す前にその前足を掴み引き寄せる。そして追撃とばかりに噛み付こうとしている獣の鼻先にヘッドバットを見舞い、怯んだところを蹴り飛ばす。

大和の肩の傷は右足のときと同じように再生を始め、瞬時に痕も残らないほどに完治していた。

獣は立ち上がり、ほんの一瞬大和を睨む。そしてすぐ、攻撃を仕掛けた。

直進する獣。

その速度は、大和がみせた瞬発力に劣らず脅威的である。

鋭い爪を立て、大和に飛び掛る。

その跳躍が見えてはいるが、見てから動くため、やはり今一步反応が遅れてしまう大和。また、ここでカウンターのタイミングを逃すのも経験のなさ故か。

なんとか爪をガードしてみせるが、押し負けてそのまま押し倒されてしまう。

「くっ！……かはっ」

受身もなしに背中を床に叩きつけてしまい、僅かに呼吸が苦しくなる。だが休憩などあるはずもなく、すぐさま喉元に喰らい付こうとする獣の牙を反射的に左腕で庇う大和。

「ぎい！」

左手首付近に、牙が食い込む。

大和の顔に降る、血と涎と生臭い息。

「このっ！！」

攻められ続けるわけにはいかないと、大和は喰い付かれていることを利用してそのまま地面に叩きつけた。

ズガッという鈍い音。

獣の口が僅かに開かれた隙に大和は自らの腕を引きずり出し、獣のどてっ腹に蹴りを入れてマウントポジションから引き摺り下ろす。その後すぐに体勢を立て直し、飛び退くようにして距離をとった。

「はぁ、はぁ、はぁ、っ——」

戦えている。

攻撃をくらいながらも、ズブの素人が戦っている。

大和は確実に互角並みの戦いを繰り広げている。

その事実が、大和の根拠のない自信を確信へと変えていき、思考

を麻痺させている。

大和の動きは、決して実戦に裏打ちされたものではない。その道の達人や、戦い慣れしている人物から見れば、戦いというのもおこがましい立ち回りだろう。だが、大和が今相手取っているのは人ではなく獣だ。

獣の爪が迫ればかわし、反撃。

獣から攻撃が来る前に、攻める。

たったそれだけの稚拙な戦いだが、人間よりも遥かに高い身体能力をもつ獣に対して接近戦を仕掛け、互角に近い戦いを繰り広げることは、恐ろしく異状だ。

「――ふ」

その異状を経験している当の大和は、いまだ酔ったような高揚感の中にいた。

「ふは、はははっ」

その感覚に笑みすら浮かべてしまうほどに、その気分には酔いしれていた。

戦えている、という確信が胸の内で大きくなるにつれ、自分の中の得体の知れない力の使い方が解き明かされていくような。――そう、子どもの頃ヒーローごっこをして遊んだときの気持ちに良く似ている。

強大な悪に立ち向かうため、秘めた力が解放される。そして、そ

の凄まじい力で、いともたやすく悪を討ち滅ぼし勝利を手に入れる。そんな、子どもの空想の中だけに許された、なににでも対抗できる力。それが、今まさに現実として自身の内に滾っている。

……やれる。

これならこの犬モドキだけじゃなく、あの俺のそっくり野郎も。

「殺れる」

まずは手始めに、

「お前からだ、犬っころ！」

しかし、興奮して啖呵をきる大和とは裏腹に、獣は幽鬼のように立ち上がった。

大和は気づいていない。

大和の異変もさることながら、獣にも変化が起きていたということに。

耐え難いほどの飢えに苦しみ、久しぶりの肉と血の味に全身がもつと超越せと歓喜し、生死の境を行き来するような戦闘で、獣も“生きる”という本能をすり減らし、研ぎ澄ましていた。

ヴォアッ！

この咆哮の意味を大和は知らない。

この状況下で見せる獣の変化を大和は捉えていない。

——獣の目が濁っている。

どこを見ているのか分からないその瞳が大和を睨み、鼻をひくつかせる。口の端から大量の血の混じった涎を垂らし、それすら美味いともいうように舐めとっては、喉を鳴らす。

意識などなくなっている。

あるのは本能、食欲という無尽蔵の欲望。

大和が獣の頭を叩きつけたことで、僅かに残っていた獣の理性が吹き飛んだ。

——獣は、進化した。

「……え？」

大和の口から僅かに疑問の声が漏れたのは、首筋から右肩にかけての肉が食いちぎられた後だった。

がくと膝をつき、そのまま崩れとそうになる体を、手を床につ

き四つん這いのかたちで踏みとどまらせる。その拍子に床に大量の血が滴ったのが大和の目に映った。

「あぐ、……あ、あ」

見えなかった。

大和は愕然とする。

全く見えなかったのだ。決して注意を逸らしたわけでもなかった、油断したわけではなかった。けれど目で追うことが出来なかった。

導かれる結論は、獣の速度が飛躍的に上がったということだ。そして、先までの速度にやつと目が慣れてきていた大和にとって、その急な変化は不意打ちとなった。

「あ　りかよ、そんなの」

顔を反らすようにして獣を見ると、ちょうど食いちぎった肉を飲み込んでいる瞬間だった。そして、食事の余韻など感じず、僅かな拳動で大和へ飛び掛る。

「っ！！」

反射的に転がって避ける。が、爪が背中の一部を奪っていった。

最大限に集中すれば見える。

しかし、避けるには反応も動作も遅すぎる。

「がっ！」

そして避けたと思って体制を立て直し終わる頃には、第二撃目が襲って来ている。

今度はわき腹に噛み付かれた。捕まえようと手を伸ばす頃には、食いちぎって距離を保っている。さっきまでの戦いの経験から本能的に接近戦は避けているのか、その距離を詰めようとはしていない。中距離から致命傷になる箇所を狙うように攻撃している。

首の太い血管を食われ、腹部を噛み千切られ、それでも大和が絶命しないのは一重に不気味ともいえる超速再生のお陰にほかならない。でなければとくに死んで獣の腹の中だ。

「……っ！ ……うつ！ ……っ！ ……！ ……あ！」

首、腹、腹、太腿、首。

次々に襲われ大和は必死に回避行動をとる。が、完全に避けきるには僅かに間に合わず。体を傷つけられるか、食われている。

間に合わない。  
対応できない。

だが不思議と絶望が大和を覆うことはなかった。

“不可能”を“可能”に出来るという、確信へと成長した気持ち  
が、大和に生き残るための術を探す支えとなっている。

「……っ、ぐあ、……ふうゝ！」

対応できないのなら、強引に対応できるよう相手を引き摺り下ろ

してやればいい。

動きが速すぎてついていけないのなら、どうにかして失速させてやればいい。

問題はどうかやって足止めをするか。

「げえ……、あつ……、……！」

かくん、と肩膝が折れて、また倒れそうになる体を支えるため、左手が血溜まりにつく。

左手？

あつた。

一度だけ、相手の動きを止められる方法が。

だがアイデアをじっくりと思案する時間などない。これで決める。この方法で決着をつける。

集中し、相手の飛び掛りのタイミングを逃すまいと身構える。

そして、その時がやって来た。

迫りくる牙。

その牙を避けることはせず、大和はその口目掛けて左腕を突き出した。その拳は、そのまま獣の口の中へと飲み込まれ、ぐじゅり、

と喰われる。

「ふ、ぐう、……ああ」

だが、すぐに食いちぎられることはない。

バキッ、ベキッ、と骨の碎ける音がした。このままにしておけば、あと5秒ほどで左腕は消える。その前に、大和は獣の全身を思い切り床へと叩きつけた。

「あゝあゝあゝ……！」

マウントポジションを奪い取り、手を引き抜く。

聞いたこともないような音と共に出てきた左腕の先に掌は付いていなかった。骨を完全に絶たれ皮だけで繋がっていたのを強引に引き出してしまったからだろう。

だが、そのことを気にして入られない。

生きるために左手を犠牲にしたのだ、もうここで息の根を止めなければいけない。

「——っ！——っ！——っ！——っ！」

獣の頭を殴る。

馬乗りになつて、全体重をかながら殴り潰す。

「——っ！——っあ！——っ！——っ！——っ！」

何度も、何度も、殴り潰す。

牙が飛ぼうが、顎が砕けようが、頭蓋が割れようが、獣の中身が飛び出そうが殴り潰し続ける。

やがて、獣の悲鳴がすっかり消えてなくなっただいぶ経ったころ、大和の手が止まった。

不恰好ながら、なんとか大和はこの訳の分からない戦い<sup>けんさ</sup>に勝ったのだ。

## 8話（後書き）

もっと長いこと戦わせようか考えたんですが、プロローグを10話までに終わらせたいのと、物語の進みが悪いのを考慮して無理矢理収めました。

1話をもっと長いこと書くことも考えました。ですが、際限なくダラダラ書いて、下手くそな文を長いこと読んでもらうのもどうかと思うので、このまま1話3000〜3500字程度で書いていこうと思います。

## 9 話（前書き）

やっぱり、練習も兼ねてもう少し戦いを書きたい。

## 9 話

「——勝ったな」

「ええ。なんというか彼は、……化物、ですね」

透明な魔法壁の向こう側。

戦闘をみていた二人の純粋な感想は、“化物をみた”だった。

太腿をワーウルフに食い千切られたことがスイッチとなったのか、大和は自身のうちにある魔力を防衛のために最大限引き出してみせた。

それはまだいい。絶体絶命になったとき、魔力が最大まで膨れ上がるのはよくある症状だ。名の知れた戦闘屋の一握りは、その感覚を訓練で体に覚えさせ、好きなときに魔力を最大まで引き出すことができる。ジークは聞いたことがあった。

問題は、大和がみせた魔力の最大量だ。

彼が目覚めたときジークが感じた魔力は確かに充分すぎるものだった。しかし、それもあくまで人の範疇だ。歴史上膨大な魔力を持つて生まれたために、善きにしろ悪きにしろ後世に名を残した者は、多くはないがいる。

ジークの横にいるクードも、一般人では考えられないほどの魔力を持っている。才能無きジークからみれば、クードだって時折化物のように見える。

そんなクードすら戦慄している。

それほど密度が濃く、純粹で膨大な、人の範疇を超える量を大和は發揮した。

それにより身体能力の向上、体の硬化。さらには感覚をコントロールすることで視覚や聴覚の鋭敏化や、痛覚の鈍化、反射速度の向上などをしてみせた。

いや、それはいい。

そんなことよりもだ。

ジークは乾いた笑いを抑えるように天を仰いだ。

魔力を利用して身体にさまざまな強化を施すことはできる。大和がやってみせたような別々の強化を一度にいくつも同時に行うなんてことは別として、体の硬化や反射速度の向上などは、『自然魔力』を使わない初歩の魔術だ。

だが、大和は常人にはできないことをやってのけた。

「超速再生……」

こればかりは、どんな天才だろうと成し遂げたものはいない。

「それこそ御伽噺、か」

全く、手に余るキーだ。

予想していたとはいえ、軽く裏切ってくれる。

「なあ、クード。お前から見てあいつの戦いはどう思う？」

少しばかり思案、というよりは考えを纏めるように無言になったあと、クードは答えた。

「才能はあるが荒く、超速再生頼みのド素人。……一言で言うなら無様な戦い方です」

「そうか。……なら、どれくらいで使い物になると思う？」

「騎士第一位に属する人間が教育したならば、ざっと、ひと月で充分かと」

「ひと月、か」

クードの評価は、厳しい言葉を述べてはいるが規格外に高い。

無様と評したが、きつとそれは生きることへの執着が見えたが故の言葉だろう。泥水を啜ってでも生きるという覚悟が大和にあれば、鍛え上げられるとクードは踏んでいるのかもしれない。

「なら、あまり力をつけさせ過ぎても困るな」

「教育者は契約四家である騎士総隊長より、第二隊隊長ゴドウィン・ローレルあたりが妥当かと」

「考えておこう。……クード、もう1つ聞きたい」  
「なんなりと」

「ゴドウィン・ローレルが教育したとして、あいつはどれくらいでお前と同等に戦えると思う？」

「……成長速度にもよりますが、1年ほどかと」

「なら、お前たち契約四家の4人が相手をしたのならば？」

「1年程度では、苦戦もせずに殺せるでしょう——」

ですが、とクードは付け加えた。

「——今の戦いでみせた才能の片鱗が本物ならば、5年後には負けるかもしれません」

あれだけの戦闘を見ただけでは、どう成長していくかなんて分からない。しかし、クードにこれだけの可能性を提示されるのは、やはりなにか感じるところがあるのか。と、ジークは閉口した。

契約四家。すなわち——

『剣のレムナンス』『影のシュベンツ』『鎧のフィーメイン』『憑のアニエル』

——ルナヘイル建国より絶対の忠義を誓う四つの家系である。

どんな才能をもった者とも一線を画す存在。言うなれば超人。その中の1人であるクードが「化物」と評したとなれば、彼は一体どこまでジークの手の中で踊ってくれるだろうか。

ジーク様、とクードが声をかける。

「ん」

「彼は“魔力に酔っている”ように見えますが、いかがいたしまし  
よう」

クードが指示を仰ぐ。

ジークが大和を見ると、ワーウルフの死骸の上でケラケラ笑い始めていた。

意図せず魔力を最大まで引き出したときに起こる、『多幸症』の症状だ。

症状としては、体温と心拍数の上昇、思考能力の低下、気分が高揚して特別な人間にでもなったかのような気になり、快楽に波に漂っているような感覚が続くというもので、魔力関係の病ではポピュラーなものである。

治療法としては、放っておいて魔力が引くのを待つ。無理矢理にでも魔術を使わせて魔力を枯渇させる。高くなった鼻っ柱を第三者が実力で叩き折る。その3つだ。

「一番手っ取り早い方法でいくか」

クードに戦う指示をだそうとしたと同時に、大和が消えた。

バリッ！！！！

その瞬間、透明な魔術壁が大和の拳によって砕かれた。

消えたのではなく、一気に跳躍して見せたのだ。その拳動を目で追えなかったのはジークだけらしい。クードはしっかりと主を守るようにして大和と対峙している。

「……ぶっ殺してやるよ、ドッペルゲンガー」

吐く言葉の端々に笑みを混ぜながら、大和はクード越しにジークを見る。

「全く、手間のかかる」

余裕を湛える演技を瞬時に行ってみせるジーク。  
ここで大和に怯えでもしたら、主導権が移り相手の症状を悪化させる。そうはさせないためにも、化物の見据えられた恐怖を推して尊大に構える。

どちらの立場が上であるのか、心の芯まで相手に植えつけなければならぬ。

「身の程を思い知らせてやれ、クード」

「はい、我が主」

瞬間。

大和とクードの姿が消えた。

大和は、獣の胴の上に馬乗りになって荒い息を吐いていた。  
目の前には、血肉に塗れた自分の両拳と、原型も残らないほどにグチャグチャになって散乱している赤いモノ。

「——はあ、はあ、はあ、……」

心臓が痛いほどに鼓動している。  
未だ収まることを知らない自身の内の力の奔流は、まるで大和を急かすかのように「もっと、もっとだ」と訴えかける。「——もっと動けるだろ？——もっと殺せるだろ？」と。

——「お前は、特別なんだから」

「……、ふ、ふはっ、はは、ははははっ！」

己が内の声に、大和は笑う。

勝った、殺した、生き延びた。その歓喜と共に、笑う。

これなら、あの馬鹿げた力で俺を縛る野郎を殺せる。

流すような視線で、透明な壁の向こうに見える2人の人影を見やる。

「そこで高みの見物か？」

ケヒヒツ、と大和は掠れるような声で笑った。

脳裏に浮かぶのは、恐怖に瞳を揺らしながら死んでいくドッペルゲンガーの姿。

啼いて、喚いて、命乞いをしながら死んでいけ。楯突こうというのなら、この獣のようにグチャグチャになってしまえ。——「さあ、

殺しに行け。俺は特別だろう?」

ぐつ、と足に力を溜めて大和は最低限の挙動で跳躍した。

目の前に迫る透明な壁。それを壊すために不安定な状態から上半身を思い切り捻って、次に溜めた力を拳に乗せて叩き割る。

バリッ!!

容易く割れる壁。

目の前には燕尾服にも似た黒服を着た青年、そして、あのドッペルゲンガー!。

大和の口角がにい、と上がり「……ぶつ殺してやるよ、ドッペルゲンガー」と口の端から漏れた。心の奥から湧き上がる力と自信。さあ、アイツはどんな顔をしてくれるだろうか。

大和が着地して立ち上がると、目の前にはドッペルゲンガーを庇うようにして黒服の青年が立ちはだかっていた。その肩越しに見えるドッペルゲンガーの顔には余裕が見て取れる。

その様子が気に入らない。

まるで、こんな状況でも大和よりも力があると言っても言うような、余裕綽々とした顔で「全く、手間のかかる」と呆れた口調で挑発をしてくる。

「……っち」

まあいい。

大和が、その顔をどんな風に歪ませてやろうか。と思索したとほぼ同時にドッペルゲンガーは黒服の青年と短いやり取りをした。

次の瞬間。

大和はなにかに首元を掴まれた。そして、再びあの獣と戦った部屋へと引き戻され、その勢いのまま床に投げ飛ばされる。

「……かはっ!!」

大和の目の前が点滅し、グワンと視界が揺れた。

僅かに見えるのは、あの黒服の青年の顔。その顔が見下している。そして、その青年が口を開き、小さいながら、確かな鋭さを持った殺気と共に言葉を発した。

「図に乗るなよ、餓鬼」

「っ」

大和が立ち上がるその前に、青年の右手の手元が青白く円形に発光した。その光が、大和に恐怖を思い出させ、とっさに飛び退く。

ズガガッ!

——と、大和が先ほどまでいた場所に3つの大きな氷柱が突き刺さっていた。

「なっ、あっ……」

何が起きたのかは分からない。しかし、大和は理解した。

この男はあのドッペルゲンガーの仲間で、紛れもない敵である。  
そして、この男を殺さなければ、自分が殺されるかもしれない。

## 10話（前書き）

今回は長くなってしまった。

そのうえ、やたら解り難い設定をどうにかして伝えようと、四苦八苦している場面があります。

## 10話

「何しやがった」

ほんの僅か。あとほんの数秒回避行動が遅れたら、刺さっていたであろう3本の氷柱は大和の胴を貫いていたであろう。そして、それは確実に大和の心臓を狙う軌道だった。

チカリ、——と大和の視界の隅でまた青白い光が煌いた。

反射的に飛び退く。

が、青年の発したものは、先の物とは違っていた。

「……な!？」

手元から射出してみせた氷柱のような殺傷性も速度もない。

しかし、それは足元を囲むように出現し、一気に大和を覆った。

水だ。——大量の水が大和の全身を包む水球と成り、息の出来ない牢となったのだ。

「じぼっ!」

くそっ、と大和は青年を睨みつける。

戦闘服には到底見えない、どちらかといえば執事ゼンとした黒服を着た青年だ。髪色と瞳は月光を思わせるような冷たいブロンド。彼は、その印象そのままの、嫌に冷めた目で水牢の中の大和を見て

いた。

舐められている、と思った。

同時に、足掻いてみる、と挑発されているようにも思えた。

「ごぼ、がぼっ」

大和は目の前の水膜を突き破ってやろうと動く。が、身体を包む水がやけに重く感じ、その場でもがくのみだ。大和が脱出できる気配はない。

もがく。足掻く。

その度に食いしばった口の隙間から空気が漏れ出て行く。

大和の目に焦りの色が、ほんの微かにだが見え始めた。

水の膜を突き破ってやろうにも、威力を出すため踏ん張る足場も無ければ、それを補うだけの加速できる空間も無い。加えてやけに強く感じる水の抵抗が、拳や蹴りの勢いを削ぎ、仮に水の膜まで攻撃が到達しても、ぐにょんと跳ね返されてしまう。

「ごぼっ」

これ以上、息を無駄に消費したくない。

息苦しさを感じ始めて大和は動きを止めた。

力押しはダメらしい。——ギリッ、と奥歯が軋みを上げた。

それでも、と大和は瞼を閉じる。

大丈夫、まだ確かに荒々しい力の流れは感じる。

大丈夫、大丈夫だ。

まだ死んでいない。獣を殺したように、こいつも殺して壊して、生き残れ。

「……ごぼ」

力押しは意味が無いと証明された。

なら、荒々しさを変化させる。繊細に、鋭く、――ぶち壊せ。

「――っ――っ」

くつくつと大和は笑った。

ああ、そうだ、と悪戯が思いついた子どものように。

そうだよ、そうだったよ。

水風船を割るのに余計な力は要らない。ただ、針で突いてやればいいんだ。

目の前の水の膜に向けて静かに手を掲げる。手は親指と人差し指を真っ直ぐ伸ばし、他の指は握りこむ形。子どもじみた“鉄砲”の形。その人差し指の先端に意識的に体中に巡る力を集める。

イメージは弾丸。  
簡単なことだ。こいつを放つだけ。

「……、っ」

射出。反動で手首がクンツと動いた次の瞬間に、水面に石を投げ込んだ時に広がる波紋にも似た閃光が水の膜の表面に走った。

バシャン！

「っ、……はあ、はあ」

大量の水で出来た牢から開放された大和は、失敗することなく着地を試みせる。対峙する青年は、ほんの少しながら片眉を上へ動かした。

「自身の『人的魔力』で、魔術に込めた意味の1つを壊したのか」  
だが、そんな程度で壊されるほど……。

ぼそり、と呟く青年。表情の機微が恐ろしく乏しいが、驚いているのだろうということだけは分かった。——この男に対して予想外のことが起こった。俺が起こしてみせた。

に、と大和の口端が上がって、気分がまた高揚する。

「様子見のつもりでしたが、その程度のことです。打ち破られてしまつとはつ」

ヒュッ、と大和の拳が空を切った。

「ちっ！」

殴りかかる大和。対して青年は軽やかにいなしてみせる。  
下、上、左、右。素人なりに大和は両拳で攻撃を仕掛けるが、青年に掠りさえしない。

それなら！

右足のローキック。しかし、それもなんなくかわされる。

だが、攻撃の手は緩めない。

一瞬でも反撃をさせるな、死にたくなければ捻り潰せ。

拳に蹴り、それぞれを驚異的な速さで大和は繰り出す。

乱舞、という言葉が言いえて妙に思える光景だ。しかしそこに乱舞本来の意味はない。ただの出鱈目な素人と熟練者の洗練された動きではない。

大和は攻撃を荒々しく乱れるように繰り出す。が、どれも避けられてしまう。その回避行動の所作一つ一つが優雅ともとれる無駄の無い動きで、大和の方ばかり体力を消耗する。

片方が乱れ狂い、片方が制御するように舞い踊る。

大和は踊らされている。それが紛れもない事実。

大和は、激しい攻撃に相手は反撃に転じることが出来ないと思っている。しかし其の実、拳1つ蹴り1つ、その威力、癖、速度、それら全てを測るかのように青年は立ち回っている。

「っ！」

低い蹴りで牽制。青年の視線は大和の放った蹴りに注がれている。それならばと、大和は蹴りを無理矢理踏み込む動作に繋げて、手の隙をつく右ストレートを顎目掛けて放つ。

これなら入る、と思った瞬間に青年の姿が視線の先から消えた。と同時に腹部に鈍痛。

「ぐあ、っ　しま！」

しまったと思うには遅すぎる。完全に誘導された。と気づいた頃には背負い投げの要領で投げ飛ばされた。

「――げふっ！」

受け身も取れないまま大の字に叩きつけられ、その際に後頭部をぶつけたのかの前が一瞬黒に染まる。ちかちかと点滅する視界の中で青年の手元が三度、円形に青白く光った。

ガコン、と大和の首元が何かに締め付けられた。まるで、首に重症を負ったときにつけるコルセットを彷彿とさせる。またなにかをされたのかと、その状態で眼球だけ動かして首元を見る大和。

「つち、？」

いや、違う。見た目はただの土だ。だが、ボロツ、と一部分崩れた土の中から覗くのは、鈍く輝く金属だった。

床から迫り出した金属が、ぎりぎりど、絞め殺そうと猛烈に首を絞めてくる。それを食い止めようと土を引っ掻く大和だが、肝心の金属は壊れない。

喉仏を押しつぶされ、「けはっ」と肺から空気が飛び出た。気道が締まる。血管も締め付けられているため、頭に血が回らない。

かひゅ、かひゅ、と大和は細い呼吸をしながら青年を見た。

静観していた。まるで勝ちを確信したかのように、悠然と立ち、なにもせず、ただ大和の意識が霞んでいくのを眺めている。

「……」

くそ、という声にならない、か細い音が喉の奥から漏れる。

——くそ、くそ、くそつ。このままじゃ殺される。死ぬ。

いやだ、怖い、死にたくない、なにか方法は？……、だれか、

だれかたすけて

この力は万能のはずだ。

身体を巡るこの力。これさえあれば俺は、負けない。

負けないなら、死なない。

俺は、死にたくない！

『ジーク』

と、朦朧として意識が途切れかけた大和の頭の中で声がした。  
愛おしい者に語りかける口調の、ひどく優しい若い男の声だった。

『ジーク。ダメじゃないか、魔術の本なんか開いて。お前はまだ小さいんだから、一人で魔術を使っではいけないと、そう教わらなかったか？』

『でも、兄ちゃん！……おれ、早くちゃんとまじゅつが使えるようになりたい』

『どうして？ ジークはまだ6歳だろ、魔術を習い始めてまだ1年じゃないか。ゆっくり上達していけばいい』

『でも。でもさ、おれ知ってるんだよ。1年もまじゆつを習ってるのに、きそすらちゃんとできてないって。……父さんが「ジークには才能がない」っていつてるのも知ってるんだ』

ぼやけた大和の脳裏に、薄っすらと映像が浮かび上がってくる。

埃臭く薄暗い部屋に、隠れるようにして自分がいる。横には分厚い本が2冊あって、1冊は開かれている。真っ直ぐ見つめる視線の先には、10代前半くらいと思える男の子が困ったような顔で佇んでいた。

プラチナカラーの髪に良く栄える優しげな蒼穹色の瞳のその青年は、ゆっくりと近づいてきて目の前で腰をおろした。そして閉じてあったほうの本を開き読み上げた。

『魔術とは、2つの魔力を使うことによって発動することが出来る。』

その様子から魔術を教えてくれるのだと察して、自分は嬉しさのあまり「ありがとう、ミュレイ兄ちゃん！」と声を上げた。その声に青年の目が一瞬嬉しそうに細まる。

『1つの魔力は『自然魔力』

これは『火』『水』『風』『土』の四つの種類があって、大気中

の何処にでも存在する。

この魔力は『属性』を持つてはいるが、『意味』を生み出すことが出来ない。だから、自然魔力は『意味』に惹かれる性質がある。』

『うん』

『元来『属性』とは、自然魔力が唯一持ちえる意味のことである。』

『火は“燃える”』『水は“変化する”』『風は“吹く”』『土は“育む”』という概念そのものである、たった1つの意味であり、それ以外持ちえない。そのため、人的魔力に込める『意味』と区別するために『属性』と言われている。』

『……うん？』

『このあたりは、追々解るようになるよ』

『が、がんばる』

『もう1つは『人的魔力』』

これは人が生まれ持つているものであり、身体の中で生成される。この魔力は人の思考を源に『意味』を持つことが出来るが、『属性』を生み出すことが出来ない。だから、『人的魔力』は『属性』に惹かれる性質がある。』

『……で、この2つのまりよくをめぐり合わせてあげる『魔<sup>かいろ</sup>方陣』を作つてやれば、『魔術』のかんせい！』

『ちゃんと分かっているじゃないか、ジーク』

——ああ。

ああ、これは記憶だ。

それも遠い昔の記憶、と大和は懐かしさと共に漠然と思った。

『魔方陣の書き方は……、熟練者になるとイメージだけで出来るようになるんだけど、初心者は手で直接書くことから慣れていかないといけない』

この、自分の内の熱い力が『人的魔力』だとするなら……。

大和は、記憶の中の青年が読み上げるとおりに、力を動かした。

『利き手の人差し指をペンだと思えばいい。自分の中の魔力はインク。紙は空気中のどこでも。』

基本は円形で、外側は魔術の込めたい意味を書いてやる。例えば、『形』『大きさ』などなど。そうやって意味で道筋を作ってやって、中心に『求む。○○』って求むの後に属性を書いてやればいい。

……最初は危なくないように小さな水球でも作ってみようか、ジーク』

大和はゆつくりと人差し指を動かした。  
形作られる、淡く青白い光を放つ円。

「……火、を」

この強固な金属を、軟く変えられるだけの火を、その円に求めて。

ぐらり、と揺れた視界。その突然の出来事に、戦闘の成り行きを見守っていたジークは片膝を床についた。それを察してクードがこちらを見たが、大丈夫だと片手をあげて制する。

『ジーク、落ち着いて』

『ジーク、ゆっくりでいいんだ』

『ジーク』 『ジーク』 『ジーク』

「……ミユレイ 兄さん」

止め処なく溢れ出る、遠い昔の記憶。

初めて自分が、兄に教えを乞いながらもしっかりと制御できる魔術を発動させたときのこと。それが、溢れかえってきている。

なぜ、今？

ジークの疑問を解くヒントは揺らぐ視線の先にあった。

大和が魔術を発動させようとしている。それを見て、思い当たった。

「あいつ。記憶の吸収のために俺が繋いだパイプを作り直して……」

記憶を吸い出す魔術。本来、他国の諜報員に使うもので、思考をプロテクトする魔術が開発されてからは廃れたものだ。

成功させるには相手の意識が無いときでないとけない。しかし、大和は今、ジークが完全に断ち切ったその魔術を復元し、強引に頭の中へ割って入ってきている。

「くそっ」

ジークは透明な魔術壁の尖った欠片を掌に突き立てた。そうして意識をハッキリとさせ、思考のプロテクトを強くする。

「いいさ、魔術の知識はくれてやる」

元々一から頭に叩き込ませるつもりだったものだ、それくらいは譲歩してやる。だが、それだけだ。それ以上は、何もくれてやらない。

「俺の頭から出て行け、九柳大和っ！」

## 11話（前書き）

まだ序章のくせして、私が飽きてきた。

駄文に加えて、文章がヤツツケ臭くなってきている……OTL

序章はあと2、3話で終わらせます。

## 11話

大和の意識が過去から急浮上するのと、手元で青白い光りを放つ円が完成したのはほぼ同時だった。

大和は完成させた。

掌を広げた大きさより一回りほど大きい位の大きさ。  
楔形文字のような記号が外周を一周、その内にもう一周。

——あ、とは……。

そして大和は、まだ空白の円の中心に手をかざした。

「……火を！」

言葉を述べると、その空白に何かが書き込まれた。

チカツと円全体が煌く。

ザア、と空気が一瞬ざわついた。と同時に円中心から入り込み隅々まで流れて満ちる力と、1つの形に留めさせようと円中心に向かい流れる力、その2つが拮抗した。まるで、溝を水が流れていくかのように、決まったルートに沿って力が正しく作用して、1つになる。

2つが拮抗し、大和の掌にこうと燃え盛る火球が生まれた。

——できた。

「……ふうっ！」

その火球を首元の金属に押し当てる。

「ぐう、！！！」

激痛がはしる。

いくら緩和されているとはいえ、人体の許容範囲を超える痛みであることに代わりはない。

制服の燃える臭いがする。  
自分の焼ける臭いがする。

初めに金属から伝わった熱が首元を襲い、次にその熱と溶けた金属が肉を焼いた。

金属が溶けて軟くなったため拘束力が緩み、息苦しさから開放される。無意識のうちに身体に酸素を送り込もうと思いつき息を吸うと、すぐ下で熱せられた空気が大和の気道を、そして肺を焼いた。

「あ、げはっ、！」

いつまでも這いつくばっているわけにはいかない。

ぐつと力を入れ、立とうとする。しかしまだ大和は動けなかった。金属は軟く溶けてはいるが、液体になるまで溶けきつてはいない。

チクシヨウ、と心の中で悪態を吐き、大和は両手で金属を掴み、

「つあ、ああ！」

そして、そのまま力任せに軟くなった金属を引き剥がした。

ぐによんと変形して、そのまま壊れる金属。

大和は、金属の拘束から何とか抜け出すことが出来た。

ふらふらと立ち上がる。

息を吸うと喉元から胸にかけてひりひりと痛んだが、一度咳と共に血を吐くと楽になった。

手と首に、溶けて張り付いた金属と痛々しい火傷がある。が、火傷は瞬く間に回復していき、その過程で邪魔なものと判断されたのか、金属はベロリと剥がれ落ちた。

後に残ったのは、何事も無かったかのように綺麗な素肌のみ。

そんな異様な光景を見ていた青年は、満身創痍の大和に向かって言い放った。「やはり化物ですね」と。そして、未だ戦闘態勢になっていない大和目掛けて魔術を放つ。

どす、と鈍い音を立てて氷柱が両太腿を貫通する。

小さく大和は呻くが、すぐに弱弱しく右手を動かし魔方陣を形成した。発生したのは先と同じ火球。そして、それを使って氷柱を溶かした。

「お前、……」

か細いながらも、大和は言葉を発した。

疑問ではあったが、その言葉にある種の確信はあった。

「俺を殺す気、ないだろ」

首筋に刃物を押し当てられたかのような鋭い殺気も、相手を押しつつぶさんとする強者の重圧も、存分に感じる。だが、攻めることはない。

大和が地面に這いつくばって金属に苦しめられているとき、止めを刺す瞬間は存分にあった。

大和が必死になって金属から脱したとき、氷柱で心臓を狙わずに足を潰しにかかった。

片手で殺してしまえそうなほど、大和は隙だらけだったはずだ。見ているほうが欠伸が出そうなほど、鈍い生き物としてその場に立っていたはずだ。

しかし、殺さなかった。

「それが、なんだというのですか？」

なにも感じさせない口調で青年は言う。

観察でもしているのか。それとも、不意を突くことは自身の矜持に反するともいうのか。いや、どちらでもなくただ単に、取るに足らない、いつでも殺せる相手だとも思っているのか。

あるいは、人が苦しみ死んで逝くのを見たくて、致命傷を避けている、真性サディストの変態野郎か。

なににせよ。

「そついうのをな、」

冷めている青年とは違い、大和の目は爛々としていた。

この瞬間。

この相手が驕っているこの瞬間こそ、最大のチャンスだと気づいていたから。

「慢心つていうんだよ！」

弱弱しさから一転、地面と平行になるような低い跳躍で青年の懷に潜り込み、瞬時に魔方阵を形成する。そして火球とは比べ物にならない業火を、アップーの要領で青年の顔に叩きつける。

炎に包まれる青年の顔。

カクンと膝から崩れ落ち、地面に倒れ伏した。

人体など一瞬にして炭化させるほどの意味を大和はこの魔術に込めた。絶命の悲鳴など、上げる暇さえ与えるつもりは無かった。

「……はあ、はあ」

殺した。

「はあ、はあ、はあ、……」

そのはずなのに。

「う、」

どすつ、どすつ、と大和の腹を後ろから2本の氷柱が貫いた。

振り向くと、冷めた目がこちらを見ている。

「あなたに忠告されずとも、慢心など有りはしません」

抑揚のない、嫌な声でこちらに言葉を投げかける。

「それに、殺したくとも死んでくれないでしょう？」

「げん、かく……？」

「教える義理はありません」

奥歯を食いしばる大和。そうして、一瞬でも勝てないと思ってしまった自分を押さえつける。まだ、死ぬつもりはないのだから。

幸い、自分も魔術が使える。今さっき初めて知ったというのに、瞬く間に理解できている。魔方陣だって一々書かずとも何とかなっている。

土俵は相手と同じだ。なら、勝機はある。

「くそっ」

両手で火球を発生させる。

右手は氷柱を溶かし、左手は相手に向けて放つ。

が、放った火球は虫でも払うかのように片手でかき消されてしまった。

「なっ！」

「そろそろ、己の身の程を知るべきです」

その言葉と共に、青年は静かに大和に向けて手をかざす。チカリ、と青年の後ろで魔方陣が発生するときの光りが煌いた。

今度はなんだ……！

対抗するため、大和も両手に火球を発生させる。が――

チカリ。

「……なんだよ」

チカリ、チカリ、チカリ、と1つまた1つと魔方陣が増えていく。

「なんだよ。ありがよ、そんなの」

直径10センチ程の魔方陣が青年の後ろに幾つも形成され増えていく。その数ざっと見て50は優に超える。そして、それら1つ1つから、アイスピックほどの氷柱が顔を覗かせ、合図が下るのを今か今かと待っている。

「こんのっ!」

火球を放つ大和。それに向かって、数本の氷柱が放たれた。

1本、2本、……。数本を溶かして消滅した大和の火球に対し、数で勝る氷柱は、大和の右胸から肩にかけてに突き刺さった。

青年の後ろでは、変化無く魔方陣が存在する。

魔方陣1つにつき氷柱1発ではなく、1つ魔方陣から何本も射出可能なかもしれない。

「……」

魔方陣の輝きに照らされる青年。  
その殺気を纏った姿に神々しさすら感じる。足が震え、呼吸が浅くなる。

長いこと忘れていたかのような、恐怖。  
勝てない、という絶望の淵に立たされたかのような感情。

「いや、……ま、まだ」

まだ、だ。

同じように、幾つも魔方陣を形成しようと大和も試みる。が、しつかりとした回路ができたのは2つまで。3つ目になると他が揺らぎ、4つ目になると先に形成した3つが消えてしまった。

「くそ……」

「そろそろ、決着です」

「っ！」

大和はきつく青年を睨んだ。

出来ないのなら別の手を。

火球で足りないのなら、業火を。業火の壁を。

手をかざして、魔方陣を形成する。

一斉に放たれる氷柱の群れ。

「くう、間に合え！」

大和は、自分と青年の間に2メートル程の業火の壁を出現させた。

壁の向こうで、氷柱がぶつかりジュツと溶ける音がする。

なんとか防げている、と次の手を考え始める大和。が、ぶすりと左わき腹に痛みがはしった。見ると、氷柱が刺さっている。

ぶす、ぶす、と続いて2発。……そして、5発。

僅かではあるが氷柱は壁を打ち破り大和に襲い掛かっている。そしてその数は着実に増えている。

「そんな……っ」

大和のその場凌ぎさえ大した抵抗にならない。

大量の氷柱に、業火が掻き消された。

「クードッ!!」

張りのある声が響く。

それに反応したかのように、大和の目の前数センチまで迫っていた氷柱の群れが全て消えうせた。

「——っ、はぁ……」

詰まった息が、安堵の固まりとなって大和の口から漏れた。そして、張り詰めていた緊張の糸が切れたためか、カクンと膝が折れて床にへたり込んでしまった。

「……あいつ」

声の主は、他でもないあのドツペルゲンガー！

手元にはあの青白い光球があり、まずいと大和が思ったときには、あの激しい痛みが大和を襲っていた。

「あぁっあゝ、ゝゝゝゝゝゝ、ぐぁゝぁゝ！！！」

変わらない、あの激痛。

身体の中がぐちゃぐちゃと掻き混ぜられるかのような感覚に叫ぶ引き裂く、捻り潰す、切り刻む、そんな痛みという痛みを集約させたかのような激痛に、のた打ち回り泣き叫ぶ。

すっ、とドツペルゲンガーが手を離れた。

引いていく痛みの中、大和は「……いだい、……いだい、……」と子どものように小さく、うわ言のように呟きながら意識を失った。

「あんな無茶苦茶なことをして、気絶で済むのか……」

ジークは、まるで人間ではない何かを見るように意識を失った大和を見た。

知識を得ただけで魔術を使うことは難しい。

魔力を均一に出し続けることで初めて魔方陣が書けるようになる。そのときに人的魔力をより多く使うことによって回路は強固になり、許容できる自然魔力の量も増えるのだ。

『意味が1つの魔術と、10の魔術では後者が強い。が、意味が1つの魔術に、10の魔術に使う分の魔力を込めたら威力は等しくなりうる。』

魔術を習うものの基礎の1つだ。

しかしこれは単純な話で、実際は魔術に込めた意味と意味とで威力の相乗効果を生んだり、追加効果が生まれたりと、変化が伴って

くる。結論として、意味を多く込めたほうが魔術として強い効力を発揮するということだ。

しかし大和は、クードの土属性魔術を打ち破った。

『強固』や『圧迫』といった多く意味を込めた魔術を、たった『球形』だけの意味を込めた火球のみで、無理矢理にでも打ち破ってみせた。

そればかりか、イメージのみで魔方陣を形成してみせた。努力家が10年以上、才能ある者でも5年前後かかる迅速な形成を、ものの一瞬でしてみせたのだ。

まだ、例外はある。

例えば、片手に『球形』、片手に『球形』と『射出』、といった2つの意味の違う魔方陣を一瞬で書いてみせたこと。いわば、右と左で違う文章を書いているのと同じだ。

例えば、基礎しかまだ知らないはずなのに、感覚的に『盾』『堅固』など複数の意味を込めた火属性魔術の壁を発動させてみせたこと。意味の込め方が荒く、熟練者からすれば脆いと取られるような出来だったが、これを魔術覚えたてで基礎しか知らない者が発動させたと聞けば驚嘆するだろう。

人的魔力の源は脳にあるとされている。

これだけ無茶苦茶なことを一瞬でしてみせて脳の過剰活動オーバーヒートによる気絶で済んでいる。常人ならば廃人も同然だろう。

「ほんとに、——化物め」

呆れともとれる独り言を漏らすジーク。

しかし、だが、と考えを改めた。

この化物には、首輪をつけてある。

眠っている間に直接身体に人的魔力で彫った拘束の魔術群。そして、なによりこいつの弱みを、——もとの世界へ帰還させる方法を、握っている。

くるりと向き直って、クードを咎めるジーク。

「クード、少々やりすぎだ」

「申し訳ありません」

跪いたまま許しを請うクード。

その真正面に、どかり、と王族らしくもなく胡坐をかき、顔を上げると言うジーク。

「で、実際に戦ってみて、なにか意見は変わったか？」

「1年は甘く見積もりすぎました。……半年も訓練すれば、互角には戦えるかと」

ふむ、と唸るジーク。

「すぐにでも決行に移そう。こいつが目覚めたら事の次第を全て伝える」

「はっ」

よし、と立ち上がろうとして、ジークの視界がぐらりと揺れる。それを見たクードはすかさず懐に入り込み、肩を回すようにして支えた。

「ジーク様っ」

「なっ、……またか!？」

この感覚は先ほど大和が頭に入り込んできたときと同じ。

溢れかえるのは、また幼い頃の記憶。

王族として世界情勢やらを色々と叩き込まれていたときの記憶。

このくらいならまだいい。

しかしこのままにしておけば、いずれ召喚直前の記憶まで図々しく人の記憶に土足で上がりこんで来るだろう。

「っ、……クード」

なら、方法は1つ。

「記憶消去の魔方陣を、今すぐ!」

記憶吸収の魔術は、入り込んでいる人間の記憶に異常が発生したら強制的に解除される使用だ。その昔、敵国の間者の頭に侵入したら、間者の脳を入り込んでいる者諸共破壊するトラップが仕掛けられていたことから取り入れられた使用だ。

それを利用し、完全に大和とのリンクが切れた瞬間、繋いでいるパイプを修復不可能なまでにクードに破壊してもらう。消去するのは、消してもさして問題のない幼少期の記憶。

こちらの意図を察したのか、クードはすぐに魔方陣を形成し始めた。

## 11話（後書き）

とりあえず、ここまで。

次はいつになるか分かんないです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2343w/>

---

見知らぬ世界にて、

2011年11月9日08時28分発行